

近づいて知った建設業

建設業というのは、私たちの日常生活に無くてはならない身近なものであるにもかかわらず、建設業と聞くとあまり良いイメージを持たれていない気がする。それどころか、危険、汚い、きついという3Kと呼ばれる建設業のマイナスイメージを持たれることがある。

その結果、建設業を学ぼうとする若者が減少してしまってことになっているのではないだろうか。建設業を私たちの生活に無くてはならない重要な仕事であると認識し、理解してもらいうには、多くの課題があると思う。まず、問題点として挙げられることは、若者たちが持つ建設業に関する知識が限りなく無知に近いといふことで、その理由は建設業に関する経験や学習がなされていらないからである。

私も建設業を学習する以前は、何の知識もなく、勝手なイメージを抱いていた。しかし建設業を学習するにつれて、建設業が担う役割を知り、また、多くの魅力を感じることが

できた。まず、建設業の役割とは、造った橋や道路がこの先何十年と残つていいくものであり、人々がその建造物を、より安全に、快適に利用できるよう全力で造らなくてはならない責任である。

私は建設業が持つ責任を2年生のときに行つたインターンシップで学んだ。インターンシップでは、地元の建設会社にお邪魔させていただき、材料の運搬や、簡単な測量作業をさせていただいたい。現場で実際に作業してみて作業員の方から「早くしろ」と言われて、より素早く正確に作業しなければ仕事ができないと感じた。人々が道路や橋を安全で快適に利用できるようにつくるには、建設業を正確に素早く安全に進めめる必要があると感じた。

そのためには、学校で学んだ知識を完全に活用し、現場のキャリアに関係なく、自分の技術を最大限に發揮しなければならぬないと思つた。

現場での責任は誰にでもあるもので、自分

だけではなく、工事に携わる多くの関係者によつて成り立ち、不完全であれば、この先建造物を利用する多くの人々に大きな迷惑が掛かるといふことを、また、そうならない為にも土木技術を習熟しなければならぬい「責任」があるといふことを3日間のインターンシップで学んだ。そして、インターンシップで現場に接して初めて、建設業がどれほど身近なものであるかを知ることができた。

3年間を通して数多くの建設工事現場を見学する機会があつた。その中で私が最も印象に残つていけるものは、3年生の時に見学した第二東名高速道路の建設現場である。私たちの生活をより快適なものにするために様々なる工夫がされている。しかし、極めて大規模な工事のためたくさんの方々とがかり、多くの条件を乗り越え完成させることがどれほど大変なことなのかを感じることができた。また、日常生活に無くてはならない社会基盤を建設することができるのは建設

業であり、いたるところに技術者たちの知識や技術が活用されているといふことに気付いた現場見学であつた。

私は建設業を見たり体験したりすることにより距離が縮まり、建設業の大切さやすばらしさを知ることができた。現在の生活は便利すぎて、建設業の有難みを感じる機会がすべりがいが、建設業は不便さを知ることで、逆に大切さを分かつてもらえるとも感じた。

私がこれまでに身に付けた知識や技術は、決して「完全」なものではない。そんな「不完全」な知識や技術をこれから「完全」なものにするべく、多くの経験を積み、成長していくきたい。そして、「建設業」が素晴らしいと胸を張って言える技術者になつていきたい。

半田工業高等学校 土木科3年
田中桂樹(たなかけいじゅ)